



**発行日**

平成 29 年 4 月 30 日



**編集委員会**

浅野明宏、尾形孝彦、  
 新聞紀文、廣原毅、  
 有吉潔、栗原繁、  
 小松崎雅順、戸井昌子、  
 大脇香織、川崎安定

**香澄**  
 KASUMI

パートナー情報誌 第11号(通巻49号)

**▲環境学習フェスタ▲**

2月18日(土曜日)に「霞ヶ浦環境科学センター環境学習フェスタ」を開催いたしました。当日は肌寒い日ではありましたが、約 1,300 名と多くの方にご来場いただきました。メイン催事の「環境学習発表会」では、霞ヶ浦南小学校、つくば市立東小学校、茨城東高等学校の皆さんに、日頃の学習の成果を発表していただき、来場した方たちにも環境への関心が高まる契機となったことと思います。

また、センター事業の運営補助や自主活動への積極的な取り組みに対するパートナー表彰では、腰塚さん、西條さん、敦賀さんの計 3 名に感謝状が贈呈されました。

御協力いただきましたパートナーの皆様へ、この場を借りて感謝申し上げます。(センター 小松崎)



**▲パートナー全体研修・交流会▲**

2月25日(土曜日)に霞ヶ浦環境科学センター多目的ホールで「パートナー全体研修・交流会」を開催しました。まず、「筑波山地域ジオパーク」の魅力について、つくば市ジオパーク推進室の杉原薫地球科学専門員に講演いただきました。センターは、筑波山地域ジオパークの「霞ヶ浦ゾーン」のジオサイト「沖宿」に位置しており、実際にセンター庭に出て実地で解説もいただきました。その後、パートナー活動報告として、植物定点観察(二階堂さん)、パートナークリーンアップ(有吉さん)、新聞スクラップ・図書紹介(内田さん)、身近な水環境の全国一斉調査(浅野さん)、魚類等定点調査(新聞さん)の活動を報告していただきました。当日は16人のパートナーの皆さんに参加していただき、今後の活動の参考になる大変有意義な会となりました。この場を借りて感謝申し上げます。(センター 北山)



# パートナー諸活動報告・計画

## ◆植物関連分野◆

### ●平成28年度後期「霞ヶ浦湖岸植物同好会」活動の報告

今期の課題:H区で第Ⅱ期自然再生事業の工事が最盛期に入り関連の植物悉皆調査、絶滅危惧種等の経過観察。

月/日	観察区	湖岸植物観察概況 (EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧種、特外:特定外来生物)
H28	AB	A区再生地でポントクタデを発見。タヌキモ(国 NT)に殖芽が付く。B区でタタラカンガレイ(県 VU)確認。
10/12	EFGH	サクラタデなどイヌタデ属が花盛り。E区でアケビやオニグルミの実が熟す。H区にミスヒマワリ(特外)出現。
	KL	オギの穂が出揃いアキノレに翼果。ノイバラの実が色付く。川尻川沿いで太い果穂のヤブマオが新出。
11/9	AB	ヨシの穂が熟しA区にスズメウリの白い実とカラスウリの赤い実。白い髭を付けたセンニンソウの実もあった。
	EFGH	H区平場と再生地でクサネム結実。E区でセイタカヨシ(県NT)の穂が出揃い、ピナンカズラの実が色付く。
12/14	KL	イヌタデ、ミソソバが結実し花被の色が濃い。オグルマの花残る。川尻川沿いでイヌザクラ、ツタが紅葉。
	AB	低地のマコモ、ヨシ、オギ、ヒメガマなどが枯れる。法面にメマツヨイグサ、スイバ、ギシギシ類のロゼット。
12/14	EFGH	アカメヤナギは落葉、タチヤナギは黄葉、カワヤナギ・ジャヤナギは緑葉が残る。H区でゴキツルの実。
	KL	オニグルミに特徴のある葉痕と冬芽。タンキリマメの弾けた赤い莢に黒い豆。オグルマの葉、枯れ始める。
H29	AB	越年草ホトケノザ、ヒメオドリコソウ、オオイヌノフグリが開花。低地に要注意外来種オオナモミの実。
1/11	EFGH	落葉したヤナギ類に冬芽(鱗芽)。H区マツカサススキに果穂。低地にオヤブジラミの緑の絨毯広がる。
	KL	ヒメカジイチゴ紅葉。水路泥上に数本のオオフサモ(特外)。タブノキ、ヤブツバキなど常緑樹の若木育つ。
2/8	AB	殖芽を付けたタヌキモ(国 NT)の葉裂片消失。ジョウロウスゲ(国 VU 県 NT)、タコノアシ(国、県 NT)の葉枯れる。
	EFGH	カワヤナギが芽鱗を脱ぎ始め、セイタカヨシの葉が枯れた。E区新出種シラカシの幼木。G区低地枯草刈。
3/8	KL	K区水際で新出種セキショウ発見。アサマスゲ(国 NT 県 EN)の葉枯れる。オノエヤナギの冬芽動き出す。
	AB	水辺でカワヤナギの花穂が開き、B区堤防南面は一面ヤハズエンドウが伸び出し緑の絨毯を敷いた様だ。
3/8	EFGH	啓蟄を過ぎた湖岸にノウルシはたくさんの芽を出し、クサヨシも枯れ茎の下から新しい葉を開いていた。
	KL	堤脚水路畔でオグルマの根出葉が伸び出し、川尻川左岸堤に新出種フラサバソウが咲いていた。



10月A区タヌキモ(タヌキモ科)多年草  
浮遊性食虫植物で捕虫囊がある。球形の殖芽で越冬する。県内分布は不明。



11月E区セイタカヨシ(イネ科)多年草  
生育の北限域にあたり県準絶滅危惧種。葉は垂れずに斜上し遅くまで緑色である。



12月L区タンキリマメ(マメ科) 県VU  
蔓性多年草。暖地性で北限域である。類似種トキリマメは葉が薄く先が尖る。



1月B区オオイヌノフグリ(ゴマノハグサ科)  
花は日の出と共に咲き、午後は落ちる。



2月G区カワヤナギ(ヤナギ科)落葉樹  
赤い芽鱗は帽子状。花穂は毛で防寒。



3月KL区フラサバソウ(オオバコ科)  
越(1)年草。北アフリカ原産の帰化種。

## ● 平成 29 年度「霞ヶ浦湖岸植物同好会」活動の計画



当同好会は、環境学習推進活動の一環として主にセンター主催の「自然観察会(植物)」に於ける運営補助及びセンター「生きものの庭」の整備、観察の補助活動と“パートナーの自主企画活動”としての「湖岸植物定点観察」を行う。

自然観察会(植物)は霞ヶ浦流域内の植物観察を通して霞ヶ浦の水質浄化に関心を深めてもらう目的で、年4回 特定月の原則第3土曜日に実施されます。湖岸植物定点観察はセンター下の湖岸(下図)において、環境の変化が植物相に及ぼす影響を見るため原則毎月第2水曜日に実施する。湖岸の代表種、絶滅危惧種、特定外来生物などは指定種として年間を通して継続観察する。またその他の植物についても特徴がある花・実・冬芽などを適時に観察・記録する。毎月各区の概要と共に旬の植物写真に説明を付け、2階展示コーナーに掲示します。

**定点観察位置図**

**地区(班)別定点観察活動の概要と指定種**

[AB区] A区:ドクゼリ(日本三大毒草)、サソモダカ(県準)、タスキモ(準)、オニナルコスゲ、他  
B区:カンエンガヤツリ(Ⅱ・県準)、カワヂシャ(準・県準)、タタラカンガレイ(Ⅱ区)、ミズヒマワリ(特外)

浮遊性食虫植物のタスキモ

[EFGH区] H27年度よりⅡ期自然再生事業施工中のH区は重点観察区。川尻川  
H区:ヤナキトラノオ(Ⅱ区)、ミクリ(準・県準)の生育状況動向を観察。環境変化に伴う新出種を予想し悉皆調査を実施。  
EFG区:サンショウモ(Ⅱ・県I B)、ワルシ(準・県準)、セイタカヨシ(県準)、ジョウロウスゲ(Ⅱ区、県準)

[KL区] アサマスケ(準・県I B)、タンキリマメ(Ⅱ区)、ミスオトギリ(県準)、ノアスキ(県準)、オグルマ、オオフサモ(特外)他

(略)Ⅱ,準:環境省絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧種、特外:特定外来生物種  
県準,県ⅡB,Ⅱ類:茨城県準絶滅危惧種、絶滅危惧ⅠB,Ⅱ類

(日程) 9:00 集合・準備(記録用紙,カメラ,巻尺他)  
9:30~10:45 H区悉皆調査(全員) 12:30~13:00 昼食  
10:50~12:20 AB・EFG・KL区観察 13:00~13:30 記録確認  
自然観察会(植物)の予定 13:30~15:30 成果物作成

月-日	テーマ	場所
(4-22)	〔霞ヶ浦流域平地林の植物生態系〕 ・早春の谷津田と里山の植物。	(行方市井上)西蓮寺周辺 「講師 福田良市先生」
(6- )	〔植物を通して学ぶ汽水湖・沼沼〕 ラムサール条約登録二周年の沼沼	(茨城町中石崎)沼沼自然公園
(9- )	〔霞ヶ浦流域河川 源流域の植物〕 桜川源流域の植物観察	(桜川市富谷)富谷観音～ 富谷ふれあいの森
(11- )	〔霞ヶ浦・人と湖の共生〕 ・自然再生地の湿性植物を学ぶ	(土浦市田村～沖宿) 国交省霞ヶ浦自然再生事業 AB,H地区

**湖岸植物定点観察**

活動月-日	関連活動
H29-4-12	春季
5-10	
6-14	
7-12	夏季
8-9	
9-13	
10-11	秋季
11-8	
12-13	
30-1-10	冬季
2-14	
3-14	
3-21	同好会総会 29年度反省,30計画

(同好会代表 パートナー 有吉)

## ◆ 新聞スクラップ活動 ◆

### ● 平成28年度活動報告

【活動日】 毎月2回(第2・4週の金曜日)

【テーマ】・霞ヶ浦流域における河川、湖沼、ダムに関する情報に限定する。

- ・水質、CO2 など水環境についての記事にも留意する。
- ・生物多様性、COP10・環境問題をテーマとした新聞社説、論説はすべてクリップする。・「茨城の水源地」シリーズなど

### ● 平成29年度活動計画

【活動日】 毎月2回(第2・4週の金曜日)

【テーマ】

- ・霞ヶ浦を中心にその周辺及び茨城県内とする。
- ・世界湖沼会議関連の記事
- ・時宣的なトピックスとしての直近のニュースなどを採り上げるケースもある。



(パートナー 内田)

## ◆パートナー霞ヶ浦クリーン up 自主活動◆

平成23年度からの活動も、丸5年となりました。真冬の厳しい寒さ、真夏の灼熱の太陽のもとにおいても、めげずに黙々と活動を続けてきました。有志による自由参加とはいえ、時には一人で活動することもあります。湖岸でレジャーを楽しんでいる皆さんから、たびたび温かい激励の言葉をいただいています。この1年間の活動を通して、パートナー有志一同、霞ヶ浦の環境保全に少しは寄与できたのではないかと、自負しておりますが、センターの支援も含め、多くの皆さんの協力があってのことと感謝しております。毎年開催される4月第3日曜日の「かすみがうらマラソン」では、参加する皆さんが気持ちよく走ってもらえるよう予定を1週間繰り上げて活動しております。

### ●平成28年度 活動報告 ●

総回収量:61袋(40L用ビニール袋)、内訳は可燃物:39.5袋、不燃物21.5袋、延べ参加人員は48人。総回収量を重量換算すると約100kgとなります。

平成28年は、9月～11月にかけて台風の発生が多く、大量のゴミが対岸から押し寄せ、回収作業は大変でした。この状況から、霞ヶ浦全域に捨てられているゴミは、計り知れない量であろうと推測できます。この影響もあり、活動地域に於ける総回収量は増加しましたが、参加者全員が1年間無事故で安全な活動ができたことに安堵しています。

### ●平成29年度 活動計画 ●

平成29年度の活動計画は、例年通り、毎月1回(年12回)の頻度で実施します。偶数月は第3日曜日、奇数月は第3金曜日の日程となります。但し、4月はかすみがうらマラソンの関係で1週間倒しとなります。詳細日程はセンターから案内されますので、ご確認下さい。

近年、霞ヶ浦を利用する人々の環境に対する意識が少しずつですが、高まっているように感じられます。実例として、「ご苦労様」や「ゴミは持ち帰るよ」などの声掛けがあり、利用者の意識の変化が見られます。些細なことですが、これが活動有志の励みともなっています。しかし、現状はまだまだポイ捨てがなくなり、これからも継続した活動推進が必要と考えます。今年度は、活動の基本である「きれいな場所に、ゴミは捨てづらい」環境づくりに向けて、更に掘り下げます。具体(例)として、回収作業時に利用者(釣り人、自転車愛好家など)の話を聞いたりして、今後の活動の糧にしたいと思います。

限られた活動範囲ですが、皆さんに愛される「うつくしい霞ヶ浦」を目指し、パートナー有志一丸となって実践します。有志の皆さんの参加をお待ちしています。  
(パートナー 尾形)

## ◆魚等定点調査報告・計画◆

パートナーでは主な魚類関連活動として、西浦合計6地点で投網による魚类等定点調査を実施しています。今年度、魚や投網に関心の高い力がパートナーとして参加、スキルアップに専念、活動に研鑽されています。当初調査は毎月(第二土曜日)実施されるも、平成26年度から隔月となり、さらに調査地点数も削減。作業時間は大幅に短縮、結果データ量は減るものの負担は軽減されました。昨今の調査結果で特筆すべき点は、カマツカにも似た、ツチフキの採捕個体数の増加です。最近では自然再生B地区に続き、センター下で重機により湖岸が埋め立てられています。こうした近年の動向にあって、当該調査の継続がより重要性を増しつつあるものと拝察されます。賛同者の来訪を衷心よりお待ち申し上げます。



(パートナー 新関)

## ◆第 13 回身近な水環境の全国一斉調査結果報告◆

「身近な水環境の全国一斉調査」は、全国水環境マップ実行委員会(委員長 小倉紀雄東京農工大名誉教授)主催のもと、毎年 6 月 5 日の「環境の日」に近い日曜日に市民グループと河川管理者が連携して実施している調査です。センターパートナーとしては「第 10 回身近な水環境の全国一斉調査(平成 25 年 6 月 2 日実施)」からセンターパートナー有志として参加しており、平成 28 年の調査で 4 回目の参加となります。

第 13 回(平成 28 年)の調査概要と調査結果は以下の通りです。また、「第 14 回身近な水環境の全国一斉調査」を平成 29 年 6 月 4 日(日)に実施予定です。パートナーの皆様、奮ってご参加下さい。

**調査日及び参加者数:**平成 28 年 6 月 5 日(日) 8 名

**調査内容・方法:**今回は統一調査マニュアルに基づく気温、水温、試水水温、パックテストによる COD 測定、自主調査として前回(第 12 回)の透視度、電気伝導度測定に加えて全窒素、全リン測定を実施しました。(全窒素、全リン測定はパートナー採水、センター湖沼環境研究室分析で実施しました)この他、特記事項として水辺の状況・流れ・濁り・散乱ごみ、川の変化について意見(今と昔)も実施しました。

**調査地点:**恋瀬川(恋瀬橋)、銚田川(旭橋)、桜川(水神橋)花室川(精進橋)

### 調査結果

調査地点	調査年月日	天候	気温(°C)	試水水温(°C)	透視度(cm)	EC(mS/m)	T-N(mg/l)	T-P(mg/l)	COD測定値(mg/l)		
									1回目	2回目	3回目
恋瀬川(恋瀬橋)	H28.6.5	曇	22.5	21	12	23.7	1.3	0.11	6	6	7
銚田川(旭橋)	H28.6.5	曇	21	17	50以上	39.8	7.8	0.11	8以上	7	8以上
桜川(水神橋)	H28.6.5	曇	21	20	26	28.3	1.1	0.098	5	5	4
花室川(精進橋)	H28.6.5	晴	24	22	37	29.6	1.4	0.10	6	6	6

※EC:電気伝導度を表す、数値が低いほど良い。COD:水の汚れ具合を表わし、数値が低いほど良い。

T-N:全窒素、T-P:全リンを表す。

### 考察:

恋瀬川～COD 値は過去 3 回に比しほぼ横ばい、透視度 12cm(前年 37cm)とわるし、朝方までの小雨の影響か。ゴミなし、流れ緩やか水面灰褐色、周辺ヨシ群繁る。

銚田川～COD 値は過去 3 回の比しほぼ横ばい、全窒素値 7.8mg/lと異常に高い、流域に所在する畜産施設排水の影響か。大きな鯉 2 尾泳ぐ。

桜川～COD 値は過去 2 回に比しほぼ横ばい、朝までの降雨の影響か、枯草浮き濁っていた。流れ緩やかで兩岸に背丈以上の草繁る。

花室川～COD 値は前年に同じ。流れはほとんど無く、川は茶灰色に濁り芝や草が少し流れていた。

(パートナー 浅野)

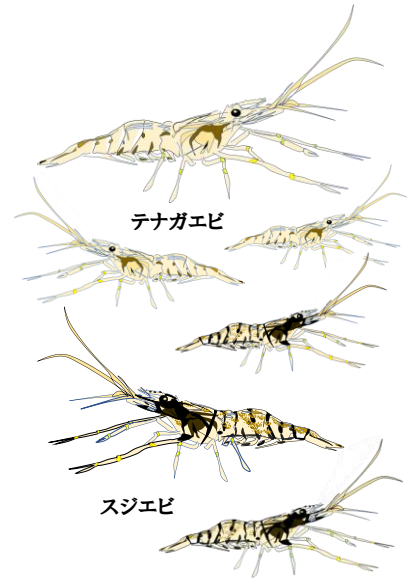


## ● 霞ヶ浦の魚たち ● (6) サイエンス 魚類生態 シリーズ

霞ヶ浦に棲む魚類の産卵生態についてみてきましたが、最後に、魚類ではありませんが、霞ヶ浦に棲む重要な生物であるテナガエビについて、若干お話しさせていただきます。

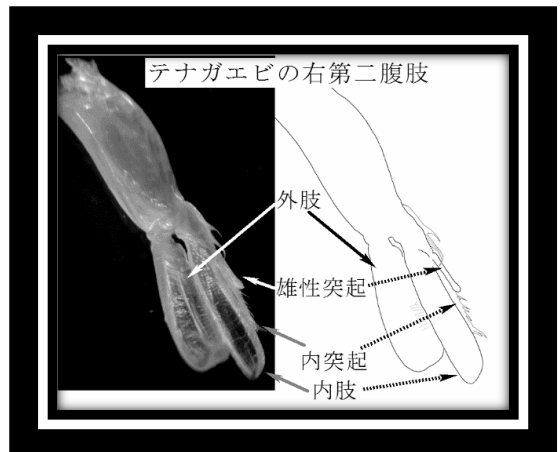
### テナガエビの生態・・・

テナガエビは、近年こそ漁獲量が減少してきていますが、依然として、霞ヶ浦の漁業にとって重要な生物であることに変わりはありません。私が内水面水産試験場に赴任した(昭和48年)当時、テナガエビは、卵を湖底に産み落とし、そこでふ化すると信じている漁師さんが結構いました。もちろん、実際はそのようなことはなく、卵はふ化するまでメスが腹につけていることはご存じの通りです。卵からふ化した子供はゾエア幼生と呼ばれ、親とは少し違った格好をしています。ゾエア幼生の時期は、ミジンコのように水中を遊泳(浮遊?)しています。この時期には、霞ヶ浦のテナガエビは多少塩分が必要で、全くの淡水中では生き延びることができません。一方、完全に陸風化されて全く塩分を必要としない群もあり、諏訪湖や琵琶湖でもテナガエビが棲んでいるようです。ふ化後約1ヶ月を、ゾエア幼生で過ごした後、エビの形に変態し湖底におり、エビとしての生活が始まります。ではいつ頃産卵するのか、また産卵の時の雌雄の行動はどうなっているのか気になるところです。



### 雌雄の見分け方・・・

雌雄はどこで見分けるのでしょうか、その前に説明の都合上、エビの身体づくりを見てみましょう。エビ類は、大きな甲羅とその後ろに瓦を連ねたような甲羅、そして、一番後ろには扇子を広げたようになった薄い部分からなっています。大きな甲羅の前の方に眼や長い触角があり、下には食事のために使われる脚(顎脚)があり、その二番目の脚がテナガエビのトレードマークである大きな爪の付いた物になっています。顎脚の後ろには、歩くために使用される脚(歩脚)が連なっています。エビ類は、この部分までが頭部と胸部となっています。そして、この部分を覆う大きな甲羅を頭胸甲と呼んでいます。この甲羅の後ろに連なる瓦状の甲羅の部分が腹部で、腹部の後端に肛門があります。エビを腹側から見ると、腹部の中央に縦に青紫の線が見えますが、これが消化管です。腹部の腹側には、遊泳時や卵を抱くときに使用される腹肢が連なっています。腹部の後ろの扇子の様な部分は、大きくは5つにわかれています。中央は三角形の尾節、その両側に左右対称に2枚の尾肢からできています。この部分が尾部となります。



さて、成熟したオスは、名前の通り手(第二顎脚)が大きく長くなるのですぐ解ります。それでは、未熟オスとメスの違いはどこにあるのでしょうか。これは肉眼ではなかなか大変なのですが、歩脚の後方にあり、生きていたときには、おなかの下でひらひらした感じで動いている腹肢の前から二番目の脚、つまり第二腹肢の形状に雌雄で違いがあります。腹肢の先端部分は外肢と内肢、内突起の3つの部分に分岐しています。そして、オスの第二腹肢には、さらに雄性突起という突起が存在します。つまり4つ分かれて見えるこの突起は、かなり小型の個体にも認められますので、顕微鏡を用いれば結構簡単に雌雄の判別がつかます(図を参考)。

成熟した雌雄は、交接により子孫を残していくわけですが、産卵後、メスはしばらく腹部に卵を抱いているわけで、その間、脱皮をするわけには行きません。そのため、メスは脱皮後早いタイミングで交接を行い抱卵します。越冬期を終えたエビは、5月頃一斉に脱皮します。そして、交接、抱卵します。この後、同一雌個体が繰り返しているかどうかは不明ですが、テナガエビ全体としては夏中これを繰り返します。

さて、オスのテナガエビは成熟すると手(第二顎脚)が大きくなりますが、この時期には物陰に隠れるなど一定の範囲に定着するようです。また、飼育観察の結果では、水槽内で手が大きくなるのは一個体のみで、他に雄がいてもそれらの手は大きくならないようです。そして、水槽から手の大きくなったエビを取り出すと、残ったエビのうち一個体が手を大きくできるようになるようです。このことから強いオスがテリトリーをもち、何らかの手段で、テリトリー内の他のオスが大きくなるのを妨げていると想像されます。

## スジエビについて・・・

現在の霞ヶ浦には、テナガエビのほかにスジエビというエビが見られます。スジエビは、メスではテナガエビとほぼ同じくらいの大きさになりますが、オスではテナガエビほど大きくはならないようです。スジエビを横から見ると、胴の真ん中あたりに黒い筋が入っていることで、すぐにテナガエビと区別が付きまします。また、水槽などに入れて上から見ると、しっぽの扇のように広がった部分の左右に、黒い斑点があることでスジエビであることが確認できます。このスジエビは、昭和年代には流入河川などでは見られるものの湖内ではほとんど見られませんでした。また、純淡水産のエビであるため、昭和年代は湖水の塩分が高すぎて、湖内に入ってこられなかったものと思われまします。湖の淡水化により、テナガエビが減少する一方、スジエビが分布を広げていったのでしょう。



(パートナー 中村)

## ◆江戸文学と旅◆ 紀行文 シリーズ

### 「私の細道」(その21)

#### いづか 飯塚の里

芭蕉は、「飯坂」を「飯塚」と称して紹介している。曾良の随行日記には「飯坂二宿」とあり、元禄当時には現在と同様「飯坂」であった。天正年間の文書には「飯塚温泉」の記載があるので、古くはそういわれ、芭蕉はこれを用いたのであろう。「信夫の里」の続きとして「飯塚の里」と記したのも芭蕉一流の表現であると思われる。行程としては、「しのぶもち摺りの石」のある山口から歩き、月の輪の渡して阿武隈川を越え、瀬上を経て鯖野の医王寺、大鳥城跡から飯坂温泉となる。「おくのほそ道」で芭蕉が心を寄せるひとつが源義経の跡を追う旅であることは既に記したが、「医王寺」はその所縁の地として、芭蕉の是非立寄りたい地であった。義経に終始付き従い非業の死を遂げた佐藤継信・忠信兄弟の父基治(庄司)一族の菩提寺である。継信は屋島の合戦で、忠信は京都でそれぞれ義経の身代わりとして討死している。義経一行は頼朝の追求を逃れて平泉に向かう途中、この地に立ち寄り、佐藤基治に会っている。義経の笈(おい)が寺宝として残されており、これを受けての芭蕉の句が「おくのほそ道」に収載されている。



# 笈も太刀も五月に飾れ紙幟 芭蕉



また、この寺には、兄弟の死後、嘆く老母乙和（おとわ）御前の心を癒さんと、その嫁らが甲冑を身に付けて兄弟凱旋の勇姿の装いをしたという故事も残されている。「おくのほそ道」での義経への思いはここから「平泉」の章段へと結びついていく。

私と妻が訪ねた時には、訪れる人も疎らで清閑な佇まいを感じた。寺社奥に義経を真ん中にした継信・忠信兄弟の石像が鎮座していた。また、墓碑の側に「乙和の椿」という古木があり、老母の情が乗り移りつぼみのままで落ちるといふ。佐藤基治の城館跡が医王寺の北方山手に大鳥城跡として整備されており、眼下に温泉街が一望できる。文治5年（1189）基治は、義経追討の鎌倉勢をこの

地で迎撃（石那坂の戦い）、大軍の前に戦死し、落城した。丘頂の本丸跡は草地として残され、往時のますらお達の声が聞こえてくるかの感があった。佐藤基治にとっては、「白河」の章段で記した「庄司戻桜」は義経が頼朝の旗揚げに馳せ参じるのを見送る場面であり、この「大鳥城」はその頼朝に攻められる場面である。基治の因果が偲ばれる。広場の隅には吉川英治撰文の碑がある。

大鳥城跡から東に下りていくと飯坂温泉の街中となる。芭蕉の時代には飯坂は既に温泉宿の町となっていたが、「おくのほそ道」によると、「土座に筵を敷きてあやしき貧家なり。灯もなければ・・・雷鳴り、雨しきりに降りて、臥せる上より洩り、蚤蚊にせせられて眠らず、持病さへおこりて、消え入るばかりになん」とさんざんな目に会ったと記している。我々が駅前の観光案内所で芭蕉の遺跡説明を受けた時も、所員がこの記載を余程気にしているのか、「芭蕉を追ってここに来る人達は『おくのほそ道』の記載を通した眼で飯坂を見るかもしれないが、地元の人達の見方も聞いてやってほしい。」と話していた。なお、曾良の随行日記には、「飯坂に宿、湯に入」とだけ記載されており、特段のひどさがあったとは書かれていない。曾良は宿の状況については特記すべき時はしており、たとえば、郡山では「宿ムサカリシ」、福島では「宿キレイ也」とある。してみれば、飯坂の湯宿が酷ければ、何らかの記載があろうと言うものである。芭蕉の宿の状況に付いての記載は、文学上の創作がここでも組み込まれたのではないかという説が大方の見方である。前段の義経追慕の論調と、後段の「鞆旅（きりよ）辺土の行脚、捨身無情の観念」と云った格調に挟み込まれた緩み挿入の一節との見解がある。であれば、飯坂の人にとってみれば迷惑千万な記載ではある。

飯坂の街は1キロ四方の中に旅館が林立し、狭い路地が縦横に交差する温泉メッカであるが、芭蕉ゆかりの像や碑なども随所に配置されている。妻とふたりで、遊歩マップを手にしばし散策し、疲れを感じた頃に旧堀切邸に立ち寄った。江戸時代からの豪農豪商であり、元禄期には酒造り問屋でもあった。広い敷地の中の端正な家構えは心を癒し、その一角に足湯手湯を利用できる場所が用意されていた。まさに疲れを癒すひと時が与えられ、芭蕉の失言戒むべしの思いがあった。

（パートナー 小松）

## 編集後記

パートナー情報誌「香澄 KASUMI」は、先達の方々の叡智と熱い思いのもとたえまない変遷を経て、通巻 49 号を数えるに至りました。編集会議は、創刊当時より編集に携わっておられる、尾形編集長を中心に目下、「パートナー相互の情報の共有、交換による横断的活動の促進」を目指し、年 4 回の発刊に合わせて行われています。編集では、更なる紙面の充実強化と読者層の拡大のためのご意見等を「香澄メールボックス」にて常時承っております。（パートナー 栗原）